九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

中国における解放以後の”双語”研究概観 ： 漢語借用語の問題を中心に

宮下, 尚子
九州大学大学院比較社会文化学府

https://doi.org/10.15017/4494553

出版情報：比較社会文化研究. 13, pp.83-95, 2003-03-31. 九州大学大学院比較社会文化研究科
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

『比較社会文化研究』第13号（2003）　83～95頁
Social and Cultural Studies
No.13 (2003), pp.83～95

中国における解放以後の“双語”研究概観

-- 漢語借用語の問題を中心に --

An overview of "shuangyu"(bilingual) studies in China after 1949

ミヤシタナオコ
宮下尚子

1. はじめに

本稿は、少数民族語と漢語間の言語接触における相互影響を考察するという観点から、中華人民共和国における“双語”研究について概観することを目的とするものである。

“双語”とは、英語の“bilingual”、"bilingualism"、日本語の「二言語併用」もしくは「二言語併用者」に相当する漢語（中国語）の術語である。Weinreich(1953)の定義に従うと、「交互に2つの言語を使用する行為」が「二言語併用（bilingualism)」であり、使用する人々が「二言語併用者（bilingual)」である。

中国は50余の少数民族を有し、そこでは少なくとも80以上の言語が用いられている多民族多言語国家である。中国の少数民族の特徴として、漢族人口に対する少数民族人口の割合の低さと漢族との雑居性の高さをあげることができる。中国国家統計局が発表した2000年第五次人口普査人口によれば、中国の漢族人口は115940万人、総人口の91.59%を占めるのに対して、少数民族人口は10643万人、総人口の8.41%を占めるのみであり（中华民共和国统计局2002:95、および「中国人口信息網」のホームページhttp://www.cpirc.org.cn/5cendata13.htm による)、数の上では明らかに中国の少数民族全てが漢語使用者となる条件が存在している。

中国の少数民族は人口の上では全国の10分の1に満たないが、居住する地方は中国国土面積の64%を占め、それらの居住地は朝鮮、ロシア、モンゴル、カザフスタン、キルギスタン、タジクスタン、アフガニスタン、パキスタン、インド、ネパール、ブータン、ビルマ、ラオス等の周辺国家と国境を接している。これら少数民族地区は、全国森林面積の半分以上、草原面積の94%を占め、豊富な鉱物資源を有し、石油、天然ガスの貯蔵量は全国の25%以上を占めるなど、経済と外交の拠点でもある（王顺洪1994:38)。このような情勢の中で、少数民族言語研究は1949年の中華人民共和国成立当時から共産党の民族政策の一環としてすすめられてきた。

1.1 先行研究

日本では中国の“双語”研究に関して、民族政策、少数民族教育や言語政策に関する研究の中で付随的にとりあげられることが多く、“双語”研究それ自体に関するものはあまり多くない。“双語”を正面から取り扱ったものには、岩佐（1983）と岡本（1999）がある。

岩佐（1983）は「漢語と少数民族言語との接触・交流の様相の紹介」を目的として、つまり、言語接触研究という立場から、1980年代初期までの中国で出版された膨大な文献を手がかりに少数民族言語および少数民族言語が漢語から受けた影響について、各少数民族言語についてそれまでの中国における研究をまとめ、概説したものである。これは言語の問題を扱った研究書であるが、同時に中国における少数民族言語研究が政治とのかかわりの中でどのようにすすめられてきたのかについても巻末（pp.231-247）にまとめられている。

岡本（1999）は中国少数民族教育の実情を共産党の政策と民族自治区域の政策との関わりの中で述べた膨大かつ有意義な研究書である。参考されている文献の数も非常に多く、政令や報告に基づいた記述や個別の民族教育実態についての記述は詳細を極め、中国の少数民族言語政策研究のためには非常に有意義な研究であるが、一括した文献目録と事項・言語名索引等を欠いているので、目次だけを頼りに特定の現象や項目を探しだすのが困難という欠点を持つ。また、同書は個別事象をおそらく教育という観点から分類し羅列することに始終したため、理論的というよりは、既成の資料により確認された事象をひたすら記述することに傾きがちである。つまり、言語計画と言語教育を語る上では必要であるだろう根拠となる理論的視点とまとまりとを欠き、中国における“双語”研究の如何については触れられていない。その他、国内で少数民族言語政策に触れたもとのとして村松（1972)、宮西（2001）等を挙げることができる。

Ramsey（1987）は中国の諸言語について、中国国内での共通語としてのMandarin（北京官話）の形成過程という

視点から、基盤となった漢語の諸方言と古漢語、過去から現在にわたり中国で行われた少数民族諸言語についての網羅的な研究である。文献目録は一般文献目録と少数民族言語関連の文献目録の二部から成り、中国国内だけでなく、台湾、日本、アメリカなどで出版された研究を含む。

1.2　本稿の構成

本稿では解放後の中華人民共和国で発行された少数民族言語および双語研究に関して、“双語”研究を概観することにより、二言語併用による言語接触が引き起こす様々な逸脱が、中国の学者によってこれまでどのようにとらえられてきたのかを検討したい。その際、少数民族言語にもたらされる漢語借用語の問題を中心に検討する。これは中国における少数民族言語と漢語との言語接触および中国の“双語”現象を語る上で必要なことである。

第1章では、中国において“双語”研究とは共産党の政策と不可分の関係にある学問分野であることを見きわめる。第2章では解放後の中国の言語学のあり方を規定したスターリンのマルクス主義言語学理論が“双語”研究にどのような影響を及ぼしたか、1950年から1960年代の研究論文を資料として概観し、第3・4章でスターリン言語学の実践とでも言うべき漢語借用語問題が、中国の言語学界においてどのように処理されてきたかを通して中国の“双語”研究が従来如何に少数民族の漢語化に傾いていたかを明らかにする。第5章では結論として、中国における“双語”研究がどのような言語観と結びついて行われてきたかを、“双語”研究の変遷を検討することで最終的に明らかにしたい。

2.　解放直後の“双語”研究

2.1　解放前、直後の少数民族語研究

周定一（1957）によると、1949年の解放以前、中国においては言語を研究するための専門機関は中央研究院歴史言語研究所の「語言研」のみであったが、解放後は共産党の指導の下、「中国文字改革委員会」「少数民族語言研究所」などの言語研究のための機関が相次いで設けられた。1951年には中央民族学院が成立し、30に近い少数民族言語専攻が設立され、あわせて何度も専門の学者を組織して少数民族地区での言語調査が行われ、当地の実際的状況に合わせて“双語”教育が実施されるに至った。

2.2　解放後の中国は何故少数民族の言語問題を重視したのか

では、解放後の中国は何故少数民族の言語問題を重視したのだろうか。

建国当初、中国共産党指導部の前には経済、社会、政治の重要課題が迫っていた。生産力の発展のためには、農地の開発や工場建設の他に、生産者の質的向上、その教育や文化・技術的水準の引き上げも大きな要因になる。生産者の質的向上のためには、生産者の基礎教育と職業訓練の場となる教育体制を作り上げ、良質の労働者、技術者の育成を加速することが不可欠であった。そのため中国は建国以来、文字改革、識字率の向上、普通話の普及、いわゆる民族共通語の標準音、文法、語彙など各方面の規範を人民の文化生活の中の重要項目とした。ところが、文字のない言語では、このようなことも不可能である。少数民族地区の経済的基盤を確立し、生産性を向上させるには、基本的な読み書きができる労働者を育て、文字の読めない人を無くすことが先決だった。周定一（1957）は、中国において言語学が共産党の政治と不可分の関係であることを指して、「国民生活とは無関係の装飾品ではなく、人民の事業に欠かすことのできない構成部分」と述べた。

ちなみに、政治的経済的に後進的な位置にある少数民族が漢語を用いるようになることが、後進的な状態からの脱却をはかるための前提条件であるという考え方は、中国においては今日においても健在である。たとえば、陳（2001）は、現在中国において政策の重点項目となっている「西部大開発」について、いわゆる西部地区① の経済開発のためには新疆地区での二言語現象を加速することが重要な措置の一つだとしている。彼は「西部」が中国内で経済的に立ち後れた地区の代名詞とされる現状を以下のように表現する。

> 西部为什么落后？因为经济不发达。经济为什么不发达？因为民族教育跟不上。为什么民族教育跟不上？因为语言不通。
> （西部はなぜ立ち後れているか？経済が立ち後れているからである。経済はなぜ立ち後れているのか？民族教育が追い付かないからである。民族教育はなぜ追い付かな

①東部地区、中部地区、西部地区という言い方は、地理的な区分ではなくむしろ経済的発展の度合いによる区分である。すなわち、東部地区とは中国経済の最も高い水準にあるとされる東南沿海地方にある北京、上海、天津、遼寧、河北、山東、江蘇、浙江、福建、広東、海南、広西の12の省と市と自治区を指す。中部地区とは経済発展のレベルが中程度の地方、すなわち黒龍江、吉林、内蒙古、山西、河南、安徽、江西、湖北、湖南の9つの省と自治区を指す。その他経済的に未発達の省、市、自治区を西部地区と言う（彭瑞情等编著，1999，【报刊阅读教程下册】北京北京语言文化大学出版社，p.149）。

②満洲族は人口265万人、黒龍江省、遼寧省、吉林省の東北三省および全国各地に分布する。1952年の調査に際して、黒龍江省にはまだ満州語の話し手が存在していたにも関わらず、満洲族の言語は死語と認定され、現在にいたるももはや再活性化の機会を与えられることはなく、文字改革および双語教育の対象にもならなかった。回族は正式には回回民族といい、中国の少数民族の中で壮族に次いで人口の多い

いのか？言葉が通じないからである。）

2.3 少数民族の単一言語使用は封鎖的か

同様の、つまり、中国においては少数民族が単一言語のみを用いることは封鎖的で経済的に立ち後れていることの現れだとする主張は文化大革命終了後の諸研究――苏金智(1993)、戴庆厦·何俊芳(1997)、詹伯慧(1999)、瞿霭堂(2000)等においても見いだすことができる。彼らは一様に経済的政治的な発展のためには辺境が中央の言語に従属するのは当然の結果だという主張を根拠にして、民族共通語として普通話を普及させることの重要性を主張する。尊重すべきは民族団結、共通語を主として、民族語を従属的な地位にというのが彼らの主張である。

このようにして、中国では解放後から現在に至るまで、“双語”の問題は文字改革や義務教育の普及と同じように国家建設のための重要な項目となる。中国の“双語”研究について語る際には常に政治状況を考慮しなければならない由縁である。

解放直後の言語学者たちも、文字のない少数民族言語への文字の創造や文字の改革、語彙の規範化、教育と出版などを通じた民族言語使用範囲の拡大と民族言語の識字率の向上を推進すること、少数民族地区での漢語の普及がそのまま中国社会全体の発展向上につながると信じていた。1950年代の中国では未だ「言語は文化である」「言語の多様性は文化の多様性を象徴する」「言語は民族のアイデンティティの一部である」という見解の発表は行われておらず、少数言語の保護，復活、再活性化などが議論されることはなかった。

2.4 中国の“双語”制がはらむ問題点

中国の“双語”制について、われわれはいくつかの構造上の問題点を発見することができる。まず、多民族国家を自認する中国において、いわゆる認定された民族語の変異（方言）への考慮がなされていないこと。つまり，中国政府により公認された55の少数民族区分に入ることのなかった少数民族や、任意の少数民族において標準的とされる以外の言語を用いる個人や集団にとっては、母語で教育を受ける権利という基本的な権利さえ保証されることはない。

中国の民族のうち絶対多数を占める漢民族についても同様の問題点を指摘できる。中国語のうち、北京官話に近い構造を持つ言語、あるいは地理的に近い場所にある言語の場合、当該言語を用いて北京語との意思疎通ができなくてもそれは中国語の一方言とみなされるため、言語に関する法的保護を受けることができない。中国政府は300万以下のモンゴル語話者のためには法律という形で言語使用に関する保証を与えることがあっても、7700万人以上とされる中国語呉方言の話者のためにはなんらの法的保護も与えてはいない（Anshen2001：711）。

また、満洲族、回族のように個別の民族としては公認されていても、言語権を保証されていない民族もいる。それは、現在中国で公認されている55の少数民族のうち、回族、満洲族については既に漢語への転用が完了した（王·傅1959）（戴庆厦1998）とされているからである。ところが、傅（1954）によると、「東北地区の極めて少ない聚居村鎮ではまだ満州語を用いている。例えば黒龍江省龍江県には82戸の聚居村があり、富裕県の62戸の聚居村もまだ満州語を用いている」と書かれているように、当時実際にはまだ満州語の話者が存在していたにもかかわらず、満洲語は現在に至るも“双語”制および“双語”研究の対象からは外されたままである②。

次に、二言語併用教育の場で採用される民族語は、原則として「標準語と文字表記の確立した言語」であるという条件が必要だということを問題点として提起しなければならない。ある言語で教育を行うには，その言語で書かれた教材が必要である。標準語としての音声と正書法にもとづく文字表記が確立されていなければ，教材は作れないし，それを教えるための教員の養成も困難になる。少数民族言語の中のいわゆる方言と認定された話者は母語で教育を受けられないことになる。Romaine（2001）は、多言語社会における少数派言語の保護について、家庭から離れた場で民族言語を系統的に習得する場がなければ、少数言語の保護は困難であり、だいたい70年の幅、つまりおよそ3世代で確実にその少数言語は消滅すると述べている。少数民族地区における理論的根拠のない民族語教育のおしつけ、普通話の強引な普及は、少数言語を消滅においやる内因をはらんでいる。

民族である。全国に散居し、主に寧夏回族自治区、甘粛正、青海、雲南、新疆、河北、北京などに比較的多く住む。イスラム教を信仰し、スンニ派に属する。海南島三亜市回輝、回新両郷の回族内部において現在も一種の“回語”が用いられている他、全国各地の回族はほとんど漢語を用い、辺境に住む者は更に当地の言語も使用する。アラビア語やペルシア語、ウイグル語を基層とする漢語を用いる（胡振华：1989）。満洲族と回族の民族教育の状況については岡村（1999：107）を参照。

③マールの言語理論は「新言語学説」または「ヤフェート理論」と呼ばれており、大略次のようなものである：(1) 現存のヤフェート諸語は前史的な前階級社会に形成された「言語基体（language primitives）」の残存である。印欧諸語は、人類が火によって金属を精錬する技術を獲得し、その技術を独占する者が他を支配する形の階級社会に達した段階で、ヤフェート諸語の「言語基体」と異言語との「交叉(crossing)」の結果生じた第三の新しい言語である；(2) 諸言語の発展段階は、個々の言語を用いる種族の社会経済体制の発展段階に左右

3.　スターリンの言語理論が中国の双語研究に与えた影響

3.1　スターリンの「言語学におけるマルクス主義について」

解放後の中国において言語学の地位向上を引き起こす直接のきっかけとなると同時に、中国の少数民族諸言語の漢語化を推進するための理論的裏付けとなったのが、1950年6月20日にソ連で『プラウダ』に発表されたスターリン（Stalin, Iosif Vissarionovich、1879-1953）の「言語学におけるマルクス主義について」（漢語のタイトルは《马克思主义与语言学问题》）の発表である。

スターリンの「言語学とマルクス主義について」とは本来、当時のソ連の言語学界を席巻していたマール（Marr, Nikolaj Jokoblevic、1864-1934）の言語理論を公式に否定するために書かれたものである③。マールの主張は当時においても非科学的かつ完全な誤りとされていたにもかかわらず、逆に、マールの死後を含めて20年間もソ連の言語学界を支配する絶対的なドグマとなっていた④。ソ連の言語学界の異常な状況に対する認識が一般的になり、反対派の根強い抵抗に脅威を感じたマール一派が、極端な異端排斥を実行して混乱を引き起こす危険が差し迫っているという情勢判断（佐藤1988: 20）を受けて、マール一派との絶縁を決意したスターリンは、反マール主義の学者を動員して、1950年5月から1か月半にわたりプラウダ紙上での公開討論を組織し、それに自らの名による裁定を下す形で、マール主義を公的に否定する措置を取った（亀井・他1996:1319)、それがスターリンの「言語学におけるマルクス主義について」なのである。

スターリンの論文を理解するためには、マルクス・レーニン主義思想と当時のソビエトにおいて言語学のおかれた状況を理解することが不可欠である。私が、浅学を承知でスターリン論文が書かれた背景と、論文そのものに向き合って感じたのは、予想通りの失望であった。スターリンの所説はいわば従来のマール批判の寄せ集めに過ぎない（佐藤1988:21-22）といわれている。その他にも、言語の非階級性とロシア語の優位性を強調するあまり、随所で牽強付会な説が展開される。殊に言語の存在理由や語彙と文法構造に関する意見など、現在の視点からすれば明らかな誤謬も少なくなく、つまるところ、この論文は、当時のソ連共産党最高指導者が言語学界の混乱を収拾するために書いた政治的な意図を十分に含んだ言語学に関する論文であるにすぎないのである。

3.2　スターリンの言語学説は中国ではどのように受け入れられたか

以上に述べたような中国とソ連の言語学的状況の乖離にもかかわらず、このスターリン論文は中国においては1950年7月11日の《人民日報》にも掲載され（应琳、高宝珍1979:307)、少なくとも1950年代においては「スターリンの天才的な」（周祖谟1952:20、马叙伦1953:3、魏建功1958:14)、「闇夜を追い立てる太陽ののごとく」（《中国語文》1953:9）という賛辞と共に語られ、中国におけるその後の言語研究のための指針とされた(马叙伦1953:3)。また、以後の言語研究における絶対的な指針、困難解決に際して現実から離脱する危険を防ぐ道しるべ、共産主義体制下にある言語学が系統的な理論を打ち立てるために必要な啓発として受け止められた（周定一1957)。

当時の中国ではマールの言語理論がどのようなものであるかは詳しく知られていなかった（王力1957)。そのため、スターリンの言語学理論は本来の意図、すなわちマールの言語理論への反駁という目的からはかけ離れて歪曲され、形骸化し、教条と化してゆく。例えば、スターリンが述べるところのマールの「まちがった非マルクス主義的定式」(スターリン1950:160)は、中国においては「肃清学阀制度,消灭马尔的错（学閥制度を粛正して、マールの過ちを消し去る）(魏建功1958:14)」のような実質的な意味を持たない形骸化したスローガンとなるとともに、その後はもっぱらいわゆる反マルクス主義者を批判するために用いられるようになった。

> 如果把斯大林话里"马尔"字面换成我们的这一时代或个别的人的字面，简直完全可以适用！(魏建功1958:14)
> (もし、スターリンの言葉の中の“マール”という字をわれわれの時代あるいは個別の人名に置き換えたとすると、まったく完全に適用できる！)

つまり、中国ではスターリン論文発表の背景を無視してスターリン論文の文字に現れた言説だけを無条件に絶対的なものとして受け止めた結果、マールの教条を否定するために書かれたスターリン論文が、逆に教条として祭り上げられるに至った⑤。このことについては岩佐（1983、1991)、およびRamsey(1987)にも若干の指摘がある。

現実には無慈悲な政治的抑圧者として君臨したスター

される、すなわち、マルクス主義言語学の課題は社会経済的発展段階と言語の生成段階の平行関係を証明することである；(3) 諸言語の語彙の構造を4つの始源的音節タイプsal, ber, yon, roshとの関連において語彙に反映した個々の発展段階のイデオロギー分析する、いわゆる「四要素分析法」の有効性を主張した；(4) 言語を社会の上部構造的範疇に含め、法律、宗教、文学、芸術などと同じ階級的支配の武器とみなす;(5) 人類の最終的発展段階である共産主義社会にあっては、無階級的非民族的な単一の世界共通語が爆発的に形成される（亀井・他1996:1318-1320、佐藤1988、村山1952)。

④佐藤（1988）は、マールがスターリンの目にとまった理由として、偏狭かつ狂信的なマールに取り入った追随者たちが中央の学術研究機関の権力を我がものにせんがため反対派をあらゆる手段で圧迫排除に努めたことと、折から反国家陰謀加担者の粛正という形で自己の

リンの主張が中国で何故絶対とされ教条となりえたか。Ramsey(1987)は、スターリンの主張は、国語支持者の堪え難いエリート主義的態度に気付いた左翼知識人によって、標準語普及のための新しい理論として受け入れられるに至ったという。彼等はソビエト理論が持つ固有の矛盾(それが具体的に何であるのかについてはRamseyは明言していない)を無視し、スターリン自身が既に少数民族への無慈悲な抑圧的政治を始めていることについても意に介しなかった。重要なのは、ソ連の理想は中国の左傾知識人に、徐々に右に傾きつつあった往年の自由主義者に採用された民族言語政策に代わる魅力的な選択肢を提供したということであった(Ramsey1987:12)。

スターリン論文の発表は、中国にとって中華人民共和国成立の第二年目にあたる年であり、中国の言語学界はまさにマールの言語学説の学習を開始し、国家建設のための民族言語文字政策を含む言語政策に着手しようとしていたときである。スターリンがマールの学説を批判したことで、中国の言語学者はマール学説を「学習」するには至らなかった(王力1954:13、周1995:1)。

中国においてはスターリン論文はマールの学説とは完全に切り離された形でのみ理解された。というのは、スターリン論文そのものの中で「マール」が名指しで批判されている以上は中国の学者も当然スターリン論文の背後にあるマールおよびマール主義について何らかの啓示を受けたには違いないが、スターリンの言語学説を理解する上で重要なものであるとは見なされることがなかった(魏建功1958:14)。そして、スターリン論文はマール主義批判という原点を飛び越えて、言語研究のあらゆる側面において援用されるべき一種の教条となるに至った。それは王力(1954)の次の表現がよく示している。

> スターリンの教導は言語学の中にマルクス主義的を注入した。目下中国言語学が研究すべき問題、例えば文字改革、語法、辞書学、漢語史、漢語方言、少数民族言語等の問題はすべてスターリンの言語学説の輝きの下で進行すべきである。本稿が討論しようとするのは漢語の標準語の問題であるが、これもスターリンの学説を根拠として行わねばならない。この問題(筆者注:漢語標準語の問題のこと)に関しては論争があると思うが、スターリンの言語発展に関する著作の導きが我々の共通の尺度となるので、遠からず正確な結論を得ることができると信じている(王力1954:13)。

文化大革命終結以前、スターリン論文がマール主義批判のために書かれたものであるにすぎないということに言及したのは管見では王力(1957)のみである⑥。

3.3 言語交配の法則と言語の「発展」

当時、中国の言語政策や少数民族言語研究に携わる学者に好まれ、しばしばもち出されたのは、スターリンが述べる言語交配の法則であった。

スターリンは言語の交配について次のように述べている。「交配は、なんらかの新しい第三の言語をつくるのではなく、それらの言語の一つを保持し、その言語の文法構造と基本的な単語のたくわえとを保持し、さらにその言語に、それ自身の内的な発展法則にしたがって発展する可能性をあたえる(スターリン1950:157)。」

これを受けて当時の中国では、少数民族言語と漢語が交配した結果、社会の発展にともなってなにかひとつの共同語ができあがるとの幻想が定着するに至った。少数民族の文化的経済的発展を阻害する要因は、多くの少数民族言語が部族語の域にとどまっていることであるとして、種々の方言が、より上位の概念である「民族語」へ「接近」および「融和」することを推進するべきだという働きかけが少数民族言語研究の上でもなされるようになった(周祖謨1954、王力1954、吴昌1955、马学良1957、周定一1957、武彦选1957、缪莺和1957、徐荣强1958、杨筱敏1960等を参照)。

解放当時、中国と少数民族の二言語間における起点言語である漢語語彙の翻訳相当語の欠如について、当時の学者たちの目には、この翻訳相当語欠如の問題は単なる二言語間の差異として映ったのではなく、少数民族言語が未だ十分な社会的発展を遂げていないことの認識として自覚された。漢族は革命の主体でありすなわち先進的であるという世界観の中にあって、少数民族は漢語を学習することによってはじめて漢族の社会主義革命と社会主義建設における豊富かつ経験先進的な経験を学ぶことができ、落後の状態を脱却できるとされていた(包1961)。

少数民族がいわゆる先進的な言語を学ぼうとする際に、対象となる起点言語は必ず漢語であり、目標言語は必ず少数民族言語であったということも明記しておかなくてはなるまい。漢語が少なくとも中国の諸言語のうち最も

反対派の抹殺に狂奔していたスターリンおよびその同腹者たちと、互いに利用し合う関係が出来たとしても不思議はなかったとする(佐藤1988:21)。

⑤日本においては、スターリン論文そのものについてよりは、『プラウダ』における公開討論からスターリンの裁定でもある同論文が発表されるきっかけとなったマールの「ヤフェット理論」が、如何に「荒唐無稽な暴論」(亀井・他1996a:1319)であったかについての論は数多くみられる(村山1952、佐藤1972・1988、亀井・他1996a)。また、スターリンの言語学に関する一連の著作については、田中(2000)がその発表にいたる経歴と日本での反響などを取り上げている。

語彙が豊富で語法の上でも先進的な言語であるということも、漢族の学者の間では自明なことであった（喻世长1961:19-20）⑦。

では、少数民族言語はどのように「発展」するのであろうか。当時の学者は、あらゆる言語にははスターリンが言うところの「内部発展の規律」が存在し、すべての少数民族言語もその規律に従って発展するであろうと考えていた。喻世长（1961）は、解放後、漢語が少数民族語に与えた影響の特徴、つまり少数民族言語が「発展」したかどうかを見極めるための証として以下の3点を挙げた：(1) 各少数民族言語は大量の漢語借用語を吸収した；(2) 本来の言語構造は基本的に保持したまま、少数民族言語の言語音、語彙、語法等の方面において全て漢語の成分を吸収した。これら漢語の成分は固有言語の成分を補填し、少数民族言語を豊富にする作用を果たしている；(3) 漢語の影響が絶え間なく深まった結果、少数民族言語のある方面において漢語とよく似た状況への転換の兆しが現れている。

以上の「発展」の証を根拠として、喻世长は漢語と少数民族言語の「相互影響」（喻世长1961:16）にともなう少数民族言語「転変」のモデルを作り上げた。第一段階：漢語借用語を吸収する過程で借用語である漢語の音声と語生成規則が少数民族言語本来の音声と統語上の特徴になじみつつある。第二段階：更に多くの漢語借用語を吸収する。借用語の音声と構造はまだ完全には少数民族言語本来の音声と統語になじんではいないが、漢語の中のある種の音声は少数民族言語の音韻体系を補充し、漢語の中のある種の語生成規則、語順、虚詞、文の格式が少数民族言語の語彙と統語体系を補充する。第三段階：漢語借用語の大量増加により、漢語の音声、統語上の特徴が少数民族言語に影響を与え、少数民族言語本来のある種の音声、統語上の特徴は漢語に似るように「転変」する。

喻世长が提出した言語「転変」のモデルは、任意の少数民族言語と漢語との間における構造的な差異、つまり、音体系や統語体系を対照して、少数民族言語が漢語に比べてどの音声や文法項目が不備であるか、どの点が余剰であるかの目録をつくることで全て無条件に説明されるというところに特徴がある。つまり、少数民族言語側に不備な項目は漢語による「補充」が行われ、少数民族言語側において余剰な項目は収斂削減され、やがては弁別の機能を失い、遂には消失するというものだ。例えば、音声的に漢語が持つ弁別機能——二重母音、三重母音等の複合母音、子音の有気と無気による対立、声調による意味対立——は、漢語借用語を通じて、本来それらによる弁別機能を持たなかった言語へ浸透していく。逆に母音の長短、子音の清濁など、漢語が持たない弁別機能は、漢語借用語の増加につれて重要性を失い、漢語が持つ弁別機能との取り替えが起こり、これと同様の現象が語彙や文法の面でも発生するとともに、少数民族言語は徐々に漢語化され、遂には消滅に向かうとするものである。

このような論理の結果、中国の言語学においては言語は「変化する」ものではなく「発展する」ものと認識されるようになった。少数民族言語はそれぞれの「内的発展の法則」にしたがい漢語の「語彙」を借用吸収することで徐々に漢語の形式に近付き発展しやがては消滅に至る、という中国に固有の、言語変化に関する理論の枠が成立し、あらゆる少数民族言語の研究に適用されるようになったのである。

こうして1950年代から1960年代にかけての中国の双語研究は、専ら少数民族言語における漢語借用語の問題に集中し、少数民族言語と漢語の「交配」の成果の捜索に没頭するようになった。

4. 借用語の問題と少数民族の言語意識

4.1 借用語の問題は何故頻繁に論じられたか

“双語”研究において借用語の問題が頻繁に論じられたのは、上記にあげたように、スターリンがその著作「言語学におけるマルクス主義について」の中で再三語彙の問題について言及し、「言語の語彙は変化に対して最も敏感（スターリン1950：152）」、「言語の語彙は……社会制度の変化、生産の発展、文化や科学などの発展につれてうまれた新しい単語を原稿の語彙に補充することによって変化する（スターリン1950：152）」と述べた他にも実際的な理由がある。

“民族語文工作”が開始され、1950年から開始された少数民族言語調査を経て言語と方言の区分と文字の創改制が行われた後に、憲法や政令を漢語に翻訳する際、漢語の術語を少数民族言語にどのように翻訳処理するかという実際的で具体的な問題が生じたためである。

「解放、土改、合作社、包办婚姻、男女平等」（程方1982の例による）等、固来の少数民族言語では表現でき

⑥王力は、1957年の《中国語文》1957年7号《中国語言学的現況及其存在的問題》（中国言語学の現状および存在する問題）において、スターリンの『言語学とマルクス主義について』出版後、中国に現れた教条主義的な傾向について次のように言及している：「解放以前の洋ものの教条はスターリンの教条のように正当かつ道理の通ったものではなかった＜注：傍点は筆者による＞」これは、スターリンの言語学説が中国の言語学界においてはすでに一種の教条とされていることを示したものである。スターリンの言語学説に対する彼の観点は明快である。つまり、「スターリンはマール学派の俗物的唯物主義観点に反対したということを指摘しなくてはならないが、スターリンの功労は埋もれさせることができないものであり、スターリンの論も基本的には正確である（王力1957:3）」と述べるごとく、スターリンの言語学説はマール主義に裁定を下したにすぎず、《中国語文》（1953）、马叙伦（1953）が述べるような、あたかもスターリンが言語学の問題のす

ない漢語借用語は“新詞術語”と呼ばれた（傅 1957）。少数民族言語における“新詞術語”の数量が非常に少ないため、民族言語の口訳と筆訳および編集作業は大きな制限を受け、中でも民族が自治区域の発足に先立ち、自らの言語で中華人民共和国憲法を翻訳することができない少数民族言語も存在したという（傅 1957：32）。

傅（1957）は少数民族言語に新しくもたらされた（あるいは今後もたらされるべき）漢語の借用語を“新詞術語”（“新詞”とは本来語彙の中に無いもので新しく増えた語、“術語”は専門的な業種や社会集団が使用する専門性を帯びた語）として、“新詞術語”の受容の現状、受け入れが阻害される原因、“新詞術語”の確立と受容のために全ての少数民族言語に適用すべき基本原則について論じたものである。これ以後、少数民族言語における“新詞術語”の問題がしばしば論じられるようになった（傅 1958、王辅弊 1958、王利宾、傅 1959、喻世长 1961 などを参照）。

4.2 借用語に関する議論の高まり

以上のような少数民族言語における漢語借用語に関する議論は、文字改革に関する議論が一段落した 1957 年ごろからさかんに行われるようになった（洛孜也夫、哈山诺夫 1954、钟 1955、刘泽先 1957、马学良 1957、傅 1957・1958・1965、王辅世 1958、周时龙 1958、王利宾 1958・1959、金天汉 1958、喻世长 1961、和志武 1961、朱志宁 1965 など）。これらのほとんどは、少数民族言語への漢語借用語を肯定的に論じており、各少数民族言語は漢語の借用語を通して次第に漢語に近付いてゆくと同時に豊富になり発展するという発想に傾く。概観すると、当時の議論のほとんどは、少数民族言語中にこれまでどのような借用語が受容されたか、音節の借用が起こったか、そして今後如何に漢語の語彙や文法項目を注入するかに尽きる感がある。

借用語に関する早い時期の議論においては、漢語の語彙を借用する場合は借用語を受け入れる側の音韻法則に則るのが自然だ、とする意見が見られた。ソ連の学者によるウィグル文学における語彙の問題を取り扱った議論（洛孜也夫、哈山诺夫 1954）では、スターリンの言語学説を敷衍しつつ、ウィグル語がかつてイスラム主義者の強制によりトルコ語、アラビア語、ペルシア語の侵入を受け発展を妨げらたことが述べられ、借用の際には「先進的で最も発達した」（洛孜也夫、哈山诺夫 1954：25）ロシア語や漢語の語彙を取り入れるべきだとしながらも、借用語を音訳で採用する場合は、漢語とウィグル後のは系統的にも発音の系統と法則の面においてもかけはなれているので、借用語を人民大衆にわかりやすく服務させるためには、当該民族の発音系統と正書法に従うようにすべきであるとしている。

1954 年に発表された朝鮮語の文字改革に関する議論で李啓烈（1954）は、朝鮮族において漢字廃止に至る原因を「字数が多く、字体がまぎらわしく、書きにくい、読みにくい、配列しにくい」（李啓烈 1954：13）と列挙し、朝鮮語において新たに借用語を採用する際には漢語の音形は朝鮮語の音法則によって朝鮮語として処理されていること、漢字の朝鮮読音とハングル正書法の規則を用いることで完全にハングルで転写できるので、ハングル書きした漢語借用語をこれまでと同様、以後大量に受容したとしても、朝鮮語の音韻体系や統語構造等の特徴は全く損なわれないとした。

実際、朝鮮語には伝統的な漢字の読音があるので、漢語から新語を借用する際、直接音訳による方法が採用されることはほとんどないといってよいだろう。しかし、一部の語彙や地名において、漢語発音をそのまま用いた直接音訳による借用が行われた結果、中国朝鮮語に特有の漢字読音として固定したものがある。

例：

漢字語	中国朝鮮語	伝統的朝鮮語（()はハングル転写）
团	퇀 (twan)	단 (dan)
排	패 (pai)	배 (bai)
屯	툰 (tun)	둔 (dun)
珲春	훈 (huncun)	혼 (honcun)
办公室	반공실 (bangongsil)	판공실 (pangongsil)
批判	피판 (pipan)	비판 (bipan)

4.3 漢語借用語に対する少数民族の危機感

大量に入り込む漢語の借用語は少数民族言語の使用者の側に母語の保持に対する危機感をもたらした。

借用語使用による外来語成分の増加が言語の純粋さを破壊するとして非難を受けたり、話し手が母語のアイデンティティを維持するため異質な要素を排除しようとすることは、多言語社会のみならず、単一言語の社会においてもしばしば観察できる。

言語に対するこのような評価は「言語意識（language

べてに有効な唯一の理論的モデルを提供したかのような扱いをするのは行き過ぎである旨を説いている。スターリンの言語学説が過剰に信奉された結果、「活発で全面的な各種の資料による具体的歴史的な研究に欠けて、スターリンの著作中の言葉を過分に引用し、全く無批判で彼の著作に向きあう」教条主義が蔓延し、具体的な言語資料に依拠した研究から離脱し、演繹的な方法でつまりなにがしかの原理から論を立て、その後原理に当てはまるような手ごろな資料をさがし出すことで自らの原理を証明するような「主観主義」的な態度が中国の言語学界において見うけられるようになった。そのため、中国の言語学は国内の過去の研究成果と西洋の言語学の成果を歴史主義的な観点によるものとして省みようとしないことで、完全に世界の水準から立ち後れた状態にあることを危惧した。

awareness)」という術語により概括されて、現在では言語研究の対象になっている。言語意識には「言語（行動）そのものについての意識だけでなく、言語主体という人的要素についての意識も重なって関わる」ので、アイデンティティーをめぐる議論では「観察対象とされる人の客観的なアイデンティティーが議論の焦点になる」こともあれば、「自分は何ものであるかという言語主体のアイデンティティー意識がその言語行動にどう関わるかを問題にする」場合もある（真田他 1992：130）。

多言語社会における多言語話者の言語変種の選択や、借用語使用における話し手の受容および拒否の態度は、話し手の帰属意識は後者のタイプのアイデンティティーが言語と言語意識とを媒介として表出したものとみることができるだろう。

それゆえ、解放前の中国朝鮮族社会や韓国においては、もっぱら日本語借用語の排斥により韓国語あるいは朝鮮語としてのアイデンティティーを確立しようとする働きかけが存在したように、解放後の少数民族社会では言語主体（話し手）のアイデンティティー意識は、漢語や漢語の借用語の使用をめぐる選択の際に、必然的に生じざるをえない。

4.4　朝鮮語純潔化運動

1957年8号の《中国语文》では既に《积极参加反右派的斗争，坚决走社会主义的道路（反右派闘争に積極的に参加して、社会主義の道を決然と歩もう）》とする社論が掲載され、これ以後の《中国语文》では言語に関わる個別的で細かい分析の他は、右派分子とされた学者を批判する記事が多数掲載されるようになる。

これに先立ち、1956年4月に毛沢東が提出した「百花斉放・百家争鳴」の方針（“双百方針”）を受けて、中国朝鮮族の間では1957年3月から6月まで《延辺日報》紙上において「朝鮮語純潔化討論」が行われ、漢語から少数民族言語である朝鮮語を守ろうとする意志が表明された（権寧俊 2000）。

自民族言語が最もすばらしいものであり、かつ、漢語の押しつけは帝国主義の同化政策にも等しい抑圧だという少数民族側の言語意識は、（金天汉 1958）において以下のように逆説的に述べられている。

他们提出＂民族语言的纯洁性＂的理由是什么呢？他们说，本民族语言是世界上最优秀而且最美好的，...（金天汉 1958:138）
（彼等は“民族言語の純潔性”を取り上げる理由は何だろう？彼等は言う、自民族の言語が世界で最も優秀かつ最も美しくすばらしいものであると……）

这种说法不但和正确地使用民族语言的提法有原则性的区别，而且充分表现了对汉族和汉语的排斥情绪。具有这种情绪的人甚至于对本民族干部用汉语作的讲演和报告也非常仇恨。他们还说：“某些本民族文化机关利全用汉语，这和一个帝国主义的民族同化政策完全相同。”
（この種の表現は、民族言語を正確に使用するという取り上げ方からは原則的に区別されるばかりではなく、漢族と漢語を排斥しようという感情をみごとに表している。この種の感情を持つ人は、自民族の幹部が漢語で行った講演や報告に対しても非常な恨みをいだきさえする。彼等はさらに次のように言う：“どこどこの本民族文化機関では全て漢語を用いる、これと帝国主義の民族同化政策とは全く同じだ。”）

金天汉（1958）は、当時少数民族側から噴出していた「民族言語の純潔性を保つ」という主張を批判するための論であるが、図らずも当時の少数民族側の感情を描き出している。つまり、少なくとも朝鮮族の間においては、朝鮮語は最も優秀かつ最も美しくすばらしいものであり、その言語を圧迫しようとする存在（つまり、漢族あるいは共産党）は、「帝国主義」つまり、旧満洲としての東北地方の侵略者であった日本がかつて東北地方で行った民族同化政策と何ら変わることはないほど抑圧的であるとしてと受け止められていたという。

4.5　“新詞術語”導入の方針と偏向への批判

文化大革命以前の中国では、漢語が唯一の民族共同語で、全ての少数民族言語は次第に漢語に近付いていき最後には融合する、という「言語融合」論が真面目に信じられていたため、少数民族言語において“新詞術語”を創作する際には「漢語に近付く（原語は“靠拢汉语”）」が唯一の正しい方針とされた（马学良等 1981：2）。

《民族语文》1979年の《发刊词》（発刊によせて）によると、当時の少数民族言語工作では、“推陈出新”（古い事

⑦黄伯荣、廖序东主编（1997:12）《现代汉语》（上）（北京：高等教育出版社）では「現代漢語」の地位として次のように述べる。「漢語は世界において長い歴史を持つ、最も高いレベルにまで発展した言語のひとつである。過去あるいは現在を問わず、漢語の国内外における影響はたいへん大きく、とても重要な地位を占めている。／わが国の各民族間の往来には長い歴史があり、政治、経済、文化等の原因により、各兄弟民族の言語は発展の中で自然により多く漢語のたくさんの影響を受けてきた。現在、各少数民族地区においては、ますます多くの人が漢語を学習し用いており、中には漢語を民族の主要な交際の道具として使用している民族もあり、多くの地区で双語（二言語）現象がみられるようになった。」

物の悪いところを取り去り、新しい方向へと発展させる)、“古为今用”(古いものを新しいものと置き換える)、“洋为中用”(外国のものを中国のものと置き換える)が方針とされ、少数民族言語研究者には、しばしば“封、资、修”(封建主義的、資本主義的、修正主義的)、“三脱離”(政治からの離脱、大衆からの離脱、実際からの離脱)、“反动学术权威”(資産階級に奉仕する学者)、“资产阶级学者”(反動的学術の権威)というレッテルが貼られたという(《民族语文》1979:3)。また、漢語借用語の研究における偏向は“挖(術語が言語としてこなれていないこと)”、“创(無理矢理に固有の少数民族言語を用いて術語を創造すること)”、“借(漢語の翻訳相当語として漢語以外の外国語借用語をむやみに借りてくること)”と総括され、批判の対象とされた。

1958年6号の《中国语文》では、巻頭論文として傅(1958)《再论国内少数民族语言中新词术语的问(国内少数民族言語中の新詞術語の問題について再び論じる)》が少数民族言語における漢語借用語の普及促進について論じている。その中で傅は“新詞術語”の創造と普及を妨げる原因として、一部の少数民族知識分子の中に存在する根強い漢語借用語排斥という偏向を挙げる(傅1958:251)。

奇妙なことに、傅(1958)と同じ号の《中国语文》に掲載された周时龙(1958)の論文は、朝鮮語における借用語の問題について朝鮮族の立場から論じ、結論として、漢語語彙を無条件に音訳で借用することを批判し、漢語借用語はできるだけ朝鮮語に置き換えるべきであるとした論である。

周时龙(1958)はその冒頭部において、次のように借用語に関する見解を披露する。朝鮮語に占める漢語借用語の比重(約三分の二程度)と漢語借用語が朝鮮人民の言語生活において果たす作用からかんがみて、漢語借用語と一般の外来語は異なるものであること、漢語外来語と朝鮮語とは既に不可分の関係にあるので、朝鮮人民が一般に指し示すところの外来借用語には漢語は含まれず、例えば英語、ドイツ語、日本語、ロシア語等のことを指す、というものである。

ところが、冒頭での論調とはうらはらに、周时龙(1958)は全部で4章あるその論の中で、第3章までをいわゆる漢語以外の外来借用語(日本語からの音訳借用語を含む)の処理問題、つまり、正書法や発音の問題に費やし、最後の第4章でおもむろに「漢語語彙と日本語語彙の処理」として漢字借用語について論じる。そこでは、朝鮮語の新聞で論じられた漢語借用語排斥運動の原因として、漢語借用語は難解なだけでなく、朝鮮語の統語規則に抵触するものが多いということをあげ、結論としては、必ず「固有の朝鮮語」を用いて表現しなければならないとしたものである(周时龙 1958:263-264)。

これは正に「朝鮮語純潔論」の根拠ともなる論理でもあり、同時期に発表された朝鮮族の金天汉(1958)の論とくらべても、周の論拠はかなりの程度まで少数民族の側からの立場を維持している。

しかし、周时龙(1958:263-264)のような論は《中国語文》においては希有に等しく、新しく少数民族言語に入って来る漢語の概念をできるだけ少数民族言語固有の表現で意訳しようという少数民族言語使用者の側からの論は、1956年以後は「かんばしからざる傾向」(常紘恩 1956)、「地方民族主義」(金天汉 1958)として批判の対象とされた。

1958年の北京少数民族出版工作会議と1959年の少数民族詞書工作会議においても、少数民族言語の“新詞術語”の創出と使用に関する報告がなされた。

王利宾・傅(1959)による上述の会議の報告は如下:(1)少数民族言語において“新詞術語”を制定する方法として、音訳、意訳、半借半訳、音訳加注、借音訳義、形態素を借用して配列する、音訳に当該言語の接辞を加える、古語(旧詞)に新しい意義を与えなおす、という九つの方法がある;(2)チベット語、モンゴル語など意訳の語が大きな比重を占めていても、全体的に見た場合、漢語の音訳が最も重要な方式の一つであり、次に意訳を行う。その他の方法を用いて“新詞術語”を制定することは少ない;(3)解放以前、各小数民族は一般に近隣の漢族かその他の民族の言語から借用語を吸収しており、借用語の基層となる言語は多かったが、解放後は主に漢語から借用語を吸収しているのが一般的な状況である;(4)早い時期に行われた音訳による借用語の中には、すでに当該少数民族言語の音素体系に適合しているものもあるが、解放後は各少数民族と漢族の政治経済文化における関係が密接になるにつれ、漢語の少数民族言語への影響も更に深まり、新しい音素と音節が増加した。このようにして、借用語の音声をもってして少数民族諸言語は、自然に漢語と近付いていく。(王利宾・傅1959:454)

以上全4項目が述べるのは、借用語を受容する際に直接音訳の方式を採用することで、漢語の少数民族言語への影響を更に深め、借用語がもたらす漢語の音声が少数民族言語を漢語に近付けようとするものである。同様の主張は罗李光(1954)等においても見られる。

4.6 漢語借用語の増加は少数民族言語にもたらした変化の実際

借用語の増加が言語のいわゆる「発展」(変化ではない)に結びつくという発想は先に挙げたスターリンの論文以外

には根拠のないものである。また当時の学者が言うところの「増加した新しい音素と音節もさらに多くなった（王利宾、傅 1959-10: 454)」という議論も実際には、新しい借用語への標識づけのために音節の借用が行われたに過ぎない。また、借用語の受容とともに母語にはかつて存在しなかった音声を受容することで、一挙に音韻体系に変化がもたらされるとするのは、かなり無理のある考え方である。

解放から文化大革命に至るまでの中国の“双語”研究は、漢語と少数民族言語との言語接触によって生じる借用語の問題について豊富な研究を行ったといえるが、それはいずれも「量」の問題に偏り「質」の問題を見落としていた。漢族および漢語の文化的影響の程度を知るには、“新詞術語”といわれるような一部の分野の語彙の多寡ではなく、漢語借用語が少数民族言語のどの領域にまで及んでいるかを調べなければならない。それは言語接触による文化変容が起きたことの言語学的証拠でもある。しかしまた一方で、漢語語彙の増加が少数民族側に母語を捨て漢語を選択させるような言語取り替えをもたらすものではないことは、語彙の中に占める漢語借用語の比重が極めて大きい朝鮮語（梅田 1996:961）の例を見ても明らかであろう。

中国の朝鮮語について言えば、漢語の借用語が朝鮮語に主にもたらした変化は、音韻体系や語彙などの目に見える体系的な変化ではなく、既存の漢字語の語彙体系と漢語語彙の併存がもたらす意味の混乱など、目に見えない部分における変化が多いと思われる。例えば、呼称において、“毛主席”、“孫書記”のような漢語における「姓＋職位」という言い方が朝鮮語にも導入されたが、本来の朝鮮語の呼称体系においては、一般に目上の人物をこのように呼ぶことはできない。必ず「金正日総書記」のように、姓名と職位を一緒に用いなければならないが、現在では朝鮮語においても姓と職位のみで目上の人物に対する尊敬の意をあらわすことができるようになった。また、既存の漢語語彙と朝鮮語漢字語の指事対象が異なる場合は、漢字語彙の方が用いられる傾向にあるようだ。例えば、朝鮮語で「演出」とは舞台や映画の監督を指し、役者を表すものではない。しかし、口語においては、監督を表すために「導演」、役者を表すために「演出」という漢字語が用いられることが多い。このような漢語と朝鮮語の同形異義語がもたらす意味の取り替えの例は、「書記」「列席」「可能」など、枚挙にいとまがない。

5. 改革開放後の“双語”研究

5.1 “双語”と民族共通語の形成という幻想

文化大革命以前の少数民族言語と“双語”現象に関わる言語への考え方は、学者によっては現在に至るまでも踏襲されている。

1979 年《民族语文》発刊以後、民族言語研究が新たな視点から再出発したにもかかわらず、現在に至るも“双語”研究に関わる分野では「民族言語の融合」「民族共同語」「言語発展の内的法則」「言語の基本語彙は簡単には変化しない」等の言説が根強く語られる（王均 1983、马学良 1988、禹岩 1989、苏金智 1993、陈恩泉 1999、瞿霭堂 2000 など)。

例を挙げれば、陈恩泉（1999）では、共同語の形成と“双語”現象とは、地域性方言の交際能力が行き詰まりることにより、新しい社会に対応できなくなり、交際の必要上生じるものであるとする。また、各自が単一の方言を用いるような社会は閉鎖的な社会であるとして、少数民族および方言話者が二言語使用者となり普通話が普及することを推奨している（陈恩泉 1999: 379)。

では、一体なぜ自民族語しか解さないことが封建的で閉鎖的思想を反映したものなるのであろうか？法律で民族間の平等が掲げられていながら、政治的な統一や経済的発展のために少数民族にばかり負担や譲歩を強いられるのは不当であると主張する者はいない。

5.2 “双語”の研究対象は国家か個人か

陈恩泉（1999）および张振兴（1999）の“双語”に関する立場とは、“双語”は少数言語の話者にのみ特有な現象ではなく、個人的な現象でもなく、それは一種の普遍的な状況にすぎないと主張している点にある。また、陈恩泉（1999）と瞿霭堂（2000）は少数民族が母語の他に漢語を習得せねばならない現状を、漢族が国際共通語としての英語等の外国語を学習する状況になぞらえ、共に“双語”の一種であるとする。「全ての中国人民が外国語を学び使用することと、少数民族が自民族の言語と漢語と外国語を学習し用いることには何ら矛盾はなく、比較の対象にもならず、更に何らの政治的意義も含まれてはいない。言い換えれば、これらは全て二言語現象であり、その他の含意はない」「もしも“双語”に学科の資格があると仮定して言うならば、中国の“双語”学や外国の“双語”学、北京の“双語”学や雲南の“双語”学などの区別はなくなってしまう」（瞿霭堂 2000: 26)。

また、1980 年代以後、“双語”がそれまでの借用語議論の枠を超えて議論されるようになったが、中国における“双語”研究を概観したときに、いわゆる“双語”の研究対象に個人という概念が欠落していることがしばしばある。たとえば、瞿霭堂（2000）では、“双語は個人あるいは一つの社会が二種類の言語を用いる現象である”というのは、各種の辞書や多くの著作の中での共通した言い方である

が、定義中の“個人”は一体どういう個人をさすのかが不正確である点、定義も不正確であり、“双語”学の研究対象は個人の“双語”現象ではないとする（瞿霭堂 2000:26）。

瞿霭堂（2000）が“双語”の研究対象から個人を閉め出す根拠は、上の「個人」の定義がはっきりしないということの他に、「言語は一種の社会的道具」であり「社会的な合意」であるから、「言語が交際の道具」ではあっても「個人の道具」とはなりえないのが「社会の常識」であるのと同じく、個人の“双語”も存在しないというものである。同様にして、社会に属する個人は双語の「能力」を有することはできても、物理的に「同時に二言語を話す行為」はできないので、「“双語”行為」はあり得ないと言う。瞿霭堂（2000）には、二言語現象の起きる究極の場は個人である（Romain2001:513）という視点が欠如している。これは加々美（1992）が主張する「個々の民族、個々の地域、個々の人々の個性と特殊性を量化し均質化する方向」づけによる「均質的国家空間の出現」に通じるものがある（加々美 1992:253-262）。個人を認めない社会にあっては個性も存在しないのと同様、中国ではいまだに個々の少数民族言語が消滅あるいは漢語に同化するよう促す何らかの圧力が存在してることを瞿霭堂（2000）の論文は裏付けている。

少数民族地区の双語制を推進する側は、漢語の強制が少数民族の漢族への同化や民族語の衰退に繋がるとは全く考えない。つまり、中国共産党が解放以来一貫して掲げる「民族平等」とは、各少数民族が平等な言語の自由、経済的政治的な平等に浴することを意味するのではなく、各少数民族が漢族を規範として個性を捨て、平等に画一化されることを意味しする。この考え方は現在に至るも中国の“双語”研究の根幹をなしている。

> 对于同化民族来说，它能吸收了被同化民族文化中的优秀部分，得到了补充和升华：对于被同化的民族来说，它溶入了更发达的同化民族的文化中去，得到了质的飞跃。所以同化是一种历史进步。（陈学迅 2001）
> （同化する側の民族は同化される民族の文化における優秀な部分を吸収することで補充と昇華を得る：同化される民族はより発達した同化する側の民族の文化へ溶け込むことで質的飛躍を遂げる。したがって、同化とは一種の歴史上の進歩である。）

尊重すべきは民族団結による国家統一であり、そのためあらゆる民族は各民族間の共通語を主体として、民族語を従属的な地位にというのが彼の主張である。

周（1995b）はスターリンが述べる「言語融合論」を肯定的に再評価したものである。現在の中国における二言語制、二方言制は、普通話への言語シフトのための橋渡し的段階であると主張する。ロシア語のように方言差が少ない言語では、一つの言語が勢力の強い言語に「次第にとけ込む」ことは可能であるかもしれないが、漢語のような方言差の大きい言語が言語を融合させるためには、言語の「転用」方式が最も好ましいモデルであり、二言語併用の状態を経て、方言や民族言語の使用者がすべて方言や民族言語を放棄して普通話に転用することが可能であると説く。

漢語と少数民族言語の二言語併用が推進された結果、意志疎通の交通手段としての役割を果たせなくなった言語が消滅しても当然であろうという見解（《民族语文》1982）も、中国の“双語”研究の特徴といえるのではないだろうか。

2001年10月には北京で《我国濒危语言问题研讨会》（わが国の危機に瀕した言語問題の研究討論会）が開催された。少数言語の維持と保護という観点からも、今後の中国の“双語”研究とその成果が、少数民族への漢語の普及以外の価値観をもって少数民族言語の活性化へと生かされることを期待するのみである。

6. おわりに

以上、本稿では中華人民共和国成立後から現在までの双語研究を、借用語の問題を中心に概観することで、中国の“双語”研究が、少数民族言語の記述という点ではかなりの成果をあげながらも、ほぼ一貫して少数民族への漢語の普及と、少数民族言語の画一化をその内なる目標として展開してきたことを概観した。

紙面の都合で全ての個別研究をとりあげることができなかった。個別言語における借用の具体例等については別の機会に論じたい。

参考文献

【中国語】

包尔汉（1961）《少数民族语文工作的巨大成绩》《中国语文》1961-3：6-8。

常紘恩，1958，《我参加少数民族语文科学讨论会的几点重要体会》《中国语文》1958-5：226-229。

陈恩泉（1996）《简论双语和双方言》《语文研究》1996-2：33-39。

陈恩泉主编（1999）《双语双方言与现代中国》北京：北京语言文化大学出版社。

陈学迅（2001）《双 — 西部大开发的加速器》《新华文摘》2001-8：133-136。

程方（1982）《京族双语制考察记实》《民族语文》1982-6：39-43。

戴庆厦、何俊芳（1997）《论“双语学”》《民族研究》

1997-6：59-64。
戴庆厦主编（1993）《跨境语言研究》北京：中央民族学院出版社。
傅懋勣（1954）《云南少数民族语文的一般情况》《国内少数民族语言文字的概况》北京：中华书局，138-145。
傅懋勣（1957）《关于少数民族语言中新词术语的问题》《中国语文》1957-10：31-34。
傅懋勣（1958）《再论国内少数民族语言中新词术语的问题》《中国语文》1958-6：251-253。
胡振华（1989）《回族与汉语》《民族语文》1989-5：37-44。
和志武（1961）《是论汉语在纳西族丰富发展中的作用》《中国语文》1961-7：24-31。
金天汉（1958）《批判“民族语言的纯洁性”的说法》《中国语文》1958-3：138-139。
李启烈（1954）《拼音文字和汉字的比较——衔淖指母铜睦史》《中国语文》1954-6：33-36。
刘泽先（1957）《汉语不能容纳外来语吗？》《中国语文》1957-5：40-41。
罗季光（1954）《斯大林论语言学的著作给研究少数民族语言的指示》《国内少数民族语言文字的概况》北京：中华书局，16-22。
洛孜也夫，哈山诺夫（1954）《论维吾尔文学语言中的词汇问题》《中国语文》1954-5：28-30。
马学良（1979）《为实现心时期的总任务多作贡献》《民族语文》1979-1：9-11。
马学良（1988）《社会科学的一个崭新的学科的发生和发展》《民族语言教学文集》成都，四川民族出版社，281-283。
马学良等（1981）《学习《决议》团结前进》《民族语文》1981-4:1-9。
马叙伦（1953）《学习斯大林的语言学说——纪念《马克思主义与语言学问题》发表三周年》《中国语文》1953- 6：3-4。
缪莺和（1957）《秦凤翔对待民族语文工作的反动观点和破坏活动》《中国语文》1957-10：8-12。
《民族语文》编织部（1979）《发刊词》1979-1：1-3。
《民族语文》编织部（1982）《我国濒危语言问题研讨会纪要》2000-6：54-59。
彭楚南译（1953）《《斯大林的语言学说基础》教学大纲》《中国语文》1953-4：32-35,12。
瞿霭堂（2000）《双语和双语研究》《民族语文》2000-3：25-32。
苏金智（1993）《语言的声望计划与双文字政策》《民族语文》1993-3：69-75。
田世棣（1954）《教少数民族同学学习汉语文的几点体验》《中国语文》1954-1：25-27。
王辅世（1958）《少数民族文字中汉语借词问题》《中国语文》1958-7：335-337。
王晶湖、郭松泉（1958）《批判王力先生《中国语言学的现况及其存在的问题》一文中的反马克思主义观点》《中国语文》1958-9，403-406。
王均（1983）《民族语文政策是我国民族政策的重要组成部分》《民族语文》1983-3：1-7。
王力（1954）《论汉族标准语》《中国语文》1954-6：13-19。
王力（1957）《中国语言学的现况及其存在的问题》《中国语文》1957-3：1-6。
王利宾、傅懋 li（1959）《我国少数民族语言科学研究工作的重要成就》《中国语文》1959-10：451-455。
王顺洪编著（1994）《中国概况》北京：北京大学出版社。
魏建功（1955）《斯大林关于语言学的论文对于中国语言科学工作的意义》《中国语文》1955-3：14-16。
吴昌（1955，，《汉语规范化对兄弟民族学习汉语的重要意义——在现代汉语规范问题学术会议上的发言——》《中国语文》1955-12：21-22。
武彦选（1957）《关于国际共同语的形成问题》《中国语文》1957-7：24-27。
徐荣强（1958）《民族也民族语的关系问题》《中国语文》1958-11：511-512。
杨筱敏（1960）《加强少数民族地区的汉语方言调查研究工作》《中国语文》1960-12：431-432。
应琳、高宝珍（1979）《建国三十年民族语文工作纪要》《民族语文》1979-4：307-316。
喻世长（1961）《关于“汉语对我国少数民族语言影响”研究中的几个问题》《中国语文》1961-12：16-22。
禹岩（1989）《少数民族语言文字在社会主义初级阶段的地位和作用》《民族语文》1989-2：1-9。
詹伯慧（1999）《略论方言、共同语与双语制问题》陈恩泉1999《双语双方言与现代中国》377-389。
张振兴（1999）《深入研究双语双方言的现象》陈恩泉1999《双语双方言与现代中国》390-393。
钟秀生（1955）《我对少数民族语文工作的几点体会》《中国语文》1955-5：24-27。
《中国少数民族双语研究论集》选编组编——1990，《中国少数民族双语研究论集》318，北京：民族出版社。
《中国语文》（1953）《痛悼革命导师斯大林同志学习并发扬他的光辉的语言学说》《中国语文》1953-3：8-9。
《中国语文》（1957）《积极参加反右派的斗争，坚决走社会主义的道路》《中国语文》1957-8：1。
中国语文杂志社编（1954）《国内少数民族语言文字的概况》北京：中华书局。
中华人民共和国国家统计局编（2002）《中国统计年 -2002》

北京：中国统计出版社。
周定一（1957）《语言科学在当的领导下向前迈进》《中国语文》1957-9：6-9。
周时龙（1958）《朝鲜语中处理外来借词的一些经验》《中国语文》1958-6：262-263。
周耀文（1995a）《中国少数民族语文使用研究》299，北京：中国社会科学出版。
周耀文（1995b）《论语言融合——嫫浪勾罅值挠锯匀诤观》《中国少数民族语文使用研究》北京：中国社会科学出版社，262-296。
周祖谟(1954)《根据斯大林的学说论汉语标准语和方言问题》《中国语文》1954-6：20-22。
朱志宁（1965）《维吾尔与中的汉语借词》《中国语文》1965-5：349-355。

【日本語】
岩佐昌暲（1983）『中国の少数民族と言語』東京：光生館。
岩佐昌暲（1991）「解放後の中国少数民族の文字」，『文明のクロスロード』38：24-30。
梅田博之(1996)「朝鮮語」『言語学大辞典』(第2巻)．東京：三省堂，950-980。
岡本雅享（1999）『中国の少数民族教育と言語政策』，東京：社会評論社。
加々美光行（1992）『知られざる祈り　中国の民族問題』東京：新評社。
亀井孝・河野六郎・千野栄一編著（1996a）「マール主義」『言語学大辞典　第6巻　術語編』東京：三省堂、1318-1320。
亀井孝・河野六郎・千野栄一編著（1996b）「マール」『言語学大辞典　第6巻　術語編』東京：三省堂、1508。
権寧俊（2000）「中国挑戦続の『朝鮮語純化運動』と漢語」『一橋論叢』123-3:495-511。
佐藤順一（1972）「言語の「進化」と革命翼――マルとポリワノフの場合」『月刊言語』1-6：19-26。
佐藤順一（1988）「ソ連言語学界のグラスノスチ――言語学者スターリンの真相など」『月刊言語』17-10：18-23。
真田信治・渋谷勝巳・陣内正敬・杉戸清樹（1992）『社会言語学』東京：おうふう。
スターリン（1950）「言語学とマルクス主義について」，『スターリン戦後著作集』東京，大月書店（1954：133-162）(Stalin, I. V., “Marksizm i Voprosy Iazykoznaniia”, 1950.)（スターリン全集刊行委員会訳、田中克彦補訳「マルクス主義と言語学の諸問題」田中『「スターリン言語学」精読』岩波現代文庫2000年にも収録)。
田中克彦（2000）『「スターリン言語学」精読』，東京：岩波書店。
宮西（藤井）久美子（2001）「中国における文字の表記法改革と「民族」概念」『ことばと社会』5:61-100，東京：三元社。
村松一弥（1972）「現代中国における少数民族の言語」『言語生活』249：50-54。
村山七郎（1951）「ソヴェト言語学の方向転換」『言語研究』17・18：156-164。

【その他】
Anshen, Frank. (2001) Language Planning. in Aronoff & Rees-Miller. (2001):704-713.
Arnoff, Mark & Janie Rees-Miller(ed.). (2001). The Handbook of Linguistics. Oxford: Basil Blackwell.
Ramsey, S. Robert. (1987). The Languages of China. New Jersey: Princeton University Press.
Romaine, Suzamme. (1989). Bilingualism. Oxford: Basil Blackwell.
Romaine, Suzamme. (2001). Multilingualism. in Aronoff & Rees-Miller(2001):512-532.
Weinreich, Uriel. (1953). Languages in Contact: Findings and Problems. The Hague: Mouton.